

景観グループ

里山の今

パトロールグループ

◆ミツバチのこと

中川 徹

ならやまで出合うミツバチは在来種のニホンミツバチが多い。日本書記に奈良の三輪山で養蜂を試みたとの記述があるほど、古くから飼育され、ハチミツが薬として貴重な甘味料として珍重されていた。

本来は野山の木々等の空間に巣をつくり一年中活動している。花の少ない冬場は巣内で数千匹が蓄えた蜜を食べ生きている。寒い日でも気温が10℃以上の日には蜜を求め、外に出るので出合うことがある。

ニホンミツバチより体色がより黄色っぽくて大きいのが、明治時代に外国からきたセイヨウミツバチである。ニホンミツバチにくらべ飼育がしやすく、とれるハチミツも格段に多いので専業の養蜂業がなりたちました。しかし、寒さとオオスズメバチに弱く、飼育には人の手助けが必要です。現在はハチミツをとること、とともに、受粉用にビニールハウスで利用するハチとして販売されたりすることが多くなっている。

アメリカのアーモンド農園では、花粉媒介を全面的に養蜂家の飼養するミツバチに依存しているのは有名であるが、日本でもイチゴ農家は、販売用の美しい形にするためには、ミツバチの受粉を必要としている。

日本養蜂協会のパンフレットによると、1つのハウスに一群、数千匹が必要で数万円すること、餌の糖蜜が絶えず必要であること、イチゴ栽培が終わると、残存したハチを巣ごと焼却処分すること、との記述があった。

彩りの森でやっと入居してくれたミツバチの冬の食料を奪うことになる採蜜に迷い、結局、巣の害虫のスムシに寄生され採蜜に失敗した私には驚きであった。

今年はなんとしても採蜜したいです。



◆ならやま春の観察会

山本 隆造

ならやま自然の森が最も華やぐ季節になりました。パトロールグループではこの時期に合わせて、4月1日ならやま春の観察会を催しました。参加者27名が3班に分かれ、小島さん、木村宥子さん、守口さんの案内のもと、自然の森を彩る花々を堪能しました。

ベースキャンプからサイクリングロードを東に向かって歩きます。彩の森を過ぎた左側斜面に、これまで気付かなかったオドリコソウ(帰化植物のヒメオドリコソウとは別種)の群落があり、白っぽい花を付けています。山桜やウワミズザクラの花を見て自然の森に入ります。

ショウジョウバカマの群落があり、10株ほど紫紅色の花が咲いています。谷の出会いから鶯の鳴き声を耳にしながら松山平に向かいます。登るにつれコバノミツバツツジの鮮やかな紅紫色の花が目立ちます。松山平手前のピークがならやま最高点(標高120m)。狭いですが、ピークに立つと下には松山平に咲くコバノミツバツツジが満開です。遠くには若草山の緑とその先の春日山原生林が望めます。

松山平で満開のツツジを堪能。実りの森へ下る途中サルトリイバラの



かわいい黄花を觀賞し、観察会は終了です。

これからもコバノガマズミ、ネジキなどの花が次々と開花します。新緑が気持ちいいこの時期、ならやま自然の森の散策がおすすめです。



虫だより



花だより

◆5月の昆虫

菊川 年明

ならやまで5月によく見られる昆虫を2種ご紹介させていただきます。

*ベニカミキリ

小型で紫がかった赤色の美しいカミキリムシである。体長は13~17mm、赤色の部分は胸部と上翅(背中)で、胸部には5つの黒紋がある。頭部と触覚は黒色である。花に集まり、蜜を吸う。赤いので、止まっても、飛んでもよく目につく。幼虫は乾燥した竹材の中で育つ。



*ヤマサナエ

サナエトンボ(類)の1種である。サナエトンボの中ではかなり大型で、体長は63~69mm、体形はスマートである。

サナエトンボは稲が早苗の頃にその大方が現れるので「サナエ」の名がつけられている。

サナエトンボの仲間は、体を水平にして止まる習性があり、地面にもよく止まる。



◆冬青

桜木 晴代

ソヨゴは里山林に数多くあり、冬にも緑の葉を茂らせ、夏には緑の実をつけ、秋に実は赤く色づき、風にそよぐ。その様から、また、冬の青さから名がついたという説がある。

ならやまで、夏のイベント時の子どもたちのノコギリ体験の対象として使われている。

4月の里山では、ソヨゴはようやく新芽が顔を出したところである。冬に落ちた赤い実は枯れ葉に覆われ姿はない。波打つ葉の特徴からソヨゴの木と判断する。



春の緑の葉



新芽

そのソヨゴの葉は薄いピンクに布を染めるという。染色家の志村ふくみさんの著書「語りかける花」に興味深い一文がある。

<姿美しく、愛くるしい冬青の寒風の中に凜としてそよぐさまが好きである。そして何よりも、そのまっ青な葉を炊き出して、染め上がってくる鴉の羽のようすべに色を何にたとえよう。私は手前勝手と笑われても、この色を中老の優しい女性におくりたい。若い女性の色ではないと。若い盛んな生命力が抜けてゆき、うっすら鼠がかった人生に、薄紅を刷いたような、年老いてこそ身に添う色なのである。髪に少し霜が下りて、老いがどこからかしのびよる間に、どうかあなたの心身をやさしく包んで——冬青の淡紅色はそういう色の響きと香気を秘めているように思われる。>

草木染めが趣味の一つのパトロールグループリーダーの小島さんは、ならやまの木々でも染めておられる。果たしてソヨゴでの染色は試みられたであろうか?